

青森県埋蔵文化財調査報告書 第316集

朝日山(2)遺跡Ⅲ

—東北電力株式会社送電鉄塔移設工事に伴う遺跡発掘調査報告—

2002年2月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第316集

朝日山(2)遺跡Ⅲ

—東北電力株式会社送電鉄塔移設工事に伴う遺跡発掘調査報告—

2002年2月

青森県教育委員会

序

青森平野周縁部の丘陵部には、縄文時代から平安時代にかけての遺跡が多数残されています。

今回、調査を行った朝日山（２）遺跡もそのひとつで、平野の西南丘陵部にあります。

一帯には細越遺跡や朝日山（１）遺跡などが隣接しており、一部は既に調査されております。ともに縄文時代晩期と平安時代中ごろの複合遺跡であることがわかっております。

この朝日山（２）遺跡の一部が、県道青森浪岡線道路改良工事に伴う送電鉄塔の移設工事に先立ち、平成12年に当センターによって発掘調査されました。

調査面積は、鉄塔部分という狭い範囲でしたが、予定地の２箇所からは平安時代中ごろの竪穴住居跡や土坑（穴）・溝跡・焼成遺構などが発見され、さらに土師器・須恵器などの焼きものや鉄滓が発見されました。これらの資料は、この地域の歴史を物語る資料として貴重なものです。

この報告書は、これらの調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の調査資料として、文化財保護の面にも役立てていただくことを希望いたします。

調査の実施及び報告書の作成にあたり、種々ご指導・ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成14年2月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 中島邦夫

例 言

- 1 本報告書は、平成12年度に東北電力株式会社送電铁塔移設工事に先だって実施した青森市朝日山(2)・(3)遺跡の発掘調査報告書である。
但し、朝日山(3)遺跡の調査区域内からは遺物・遺構は検出されなかったため、報告書名は『朝日山(2)遺跡Ⅲ』とした。
- 2 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集・作成した。なお、執筆者名は文末に付した。
- 3 挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は図ごとに倍率を記した。
- 4 遺構内外の堆積土の色調観察には、『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄 1996)を用いた。
- 5 遺構図面中でスクリーントーンを使用したものについては、図ごとに凡例を付した。
- 6 遺構図面は、北方向を上にした。北は真北を使用した。
- 7 平安時代の遺物実測は、主に成田誠治が行った。
- 8 遺物実測図で、須恵器の断面は黒塗りとし、火罨痕はスクリーントーンで表現した。また、土師器で内面黒色処理を行ったものについては内面にスクリーントーンを貼付した。
- 9 観察表及び遺構図の遺構名は、第・号を省略しているものもある。
- 10 写真図版の遺物番号は、それぞれの遺物実測図と符合している。
- 11 石器の石質鑑定は、青森県史編さん室総括主幹 山口義伸氏に依頼した。
- 12 本書に掲載した地形図(遺跡位置図)は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写したものである。
- 13 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査要項	1
第Ⅱ章 沖館A線No.1鉄塔	5
第1節 調査の経過	5
第2節 検出遺構	6
第3節 出土遺物	10
第Ⅲ章 沖館A線No.2鉄塔	14
第1節 調査の経過	14
第2節 出土遺物	15
第Ⅳ章 五所川原線No.1鉄塔	17
第1節 調査の経過	17
第2節 検出遺構	18
第3節 出土遺物	28
第Ⅴ章 五所川原線No.2鉄塔	40
第Ⅵ章 青弘線No.2鉄塔	41
第Ⅶ章 まとめ	42
写真図版	43
報告書抄録	51

第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経過

県土木部道路建設課（青森土木事務所）が青森市高田の朝日山地区で計画している県道青森浪岡線道路改良事業に伴い、道路予定地内にある東北電力株式会社の送電鉄塔の移設問題が生じたことから、平成11年度にその移設先の埋蔵文化財の取り扱いについて、東北電力株式会社青森支店と県教育庁文化課との間で協議が行われた。

朝日山地区では、朝日山（2）遺跡が平成10年度・11年度と、県道青森浪岡線の道路予定地が当センターによって発掘調査されているが、移設先のうち沖館A線№1・2鉄塔、五所川原線№1・2鉄塔の4ヶ所が朝日山（2）遺跡に含まれることが確認され、さらに近接した道路予定地の調査状況から遺構・遺物の発見が予想された。また、朝日山（2）遺跡とは小さな沢を挟んだ対岸の丘陵部にある青弘線№2鉄塔箇所が朝日山（3）遺跡に含まれることが確認され、何らかの調査が必要とされた。

これをうけて、平成11年12月に県文化課と当センターとの間で、翌年度の調査実施にむけて最終的な結めの打ちあわせが行われ、5月1日から5月31日までの予定で600㎡を対象とした発掘調査が実施されることとなった。

翌平成12年、調査開始をやや早め、4月24日から5月31日までの日程で行われたが、調査の途中で、沖館A線№1鉄塔近接地に、資材搬入道路で削平される小区域があることが判明したので、これも含めて調査を行った。（福田）

第2節 調査要項

1 調査目的

平成12年度東北電力株式会社送電鉄塔移設工事の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市朝日山（2）・（3）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財活用に資する。

2 発掘調査期間

平成12年4月24日から5月31日まで

3 遺跡名及び所在地

朝日山（2）遺跡 青森市大字高田字朝日山398-8外

朝日山（3）遺跡 青森市大字高田字朝日山717-7外

4 発掘調査面積

600平方メートル

5 調査委託者

東北電力株式会社青森支店

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

青森県埋蔵文化財調査センター

所長	中島 邦夫
次長	成田 誠治
総務課長	西口 良一
調査第二課長	福田 友之
文化財保護主幹	白鳥 文雄
文化財保護主事	田中 珠美 (現、新山)
調査補助員	工藤 百恵、柴田 洋子

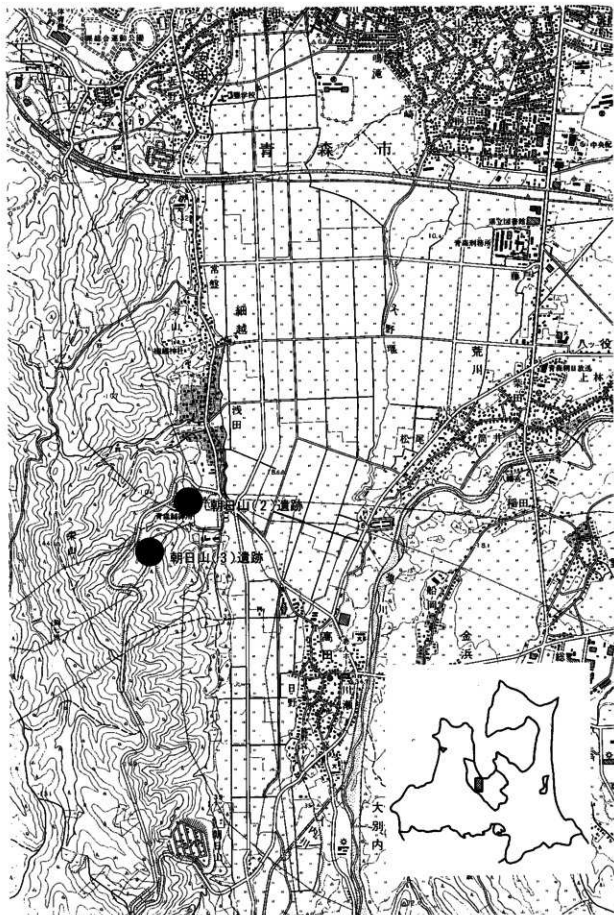


図1 遺跡位置図

(国土地理院2.5万分の1「青森西部」)

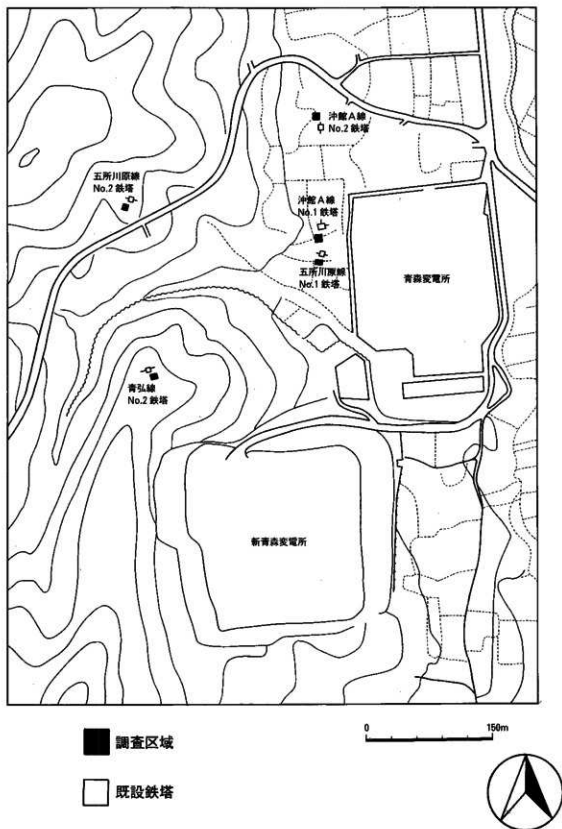


図2 調査区域位置図

第II章 沖館A線No.1鉄塔

第1節 調査の経過

地番：青森市高田字朝口山417、外 対象範囲：11.6m四方・約3m×5m

調査区域は、買収後に耕作を休止した畑地で、調査開始時は草地となっていた。また、中央部に調査区を二分する比高差約2メートルの段差があった。

調査はまず、試掘のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認することとした。

この結果、上段ではほぼ全域にわたる遺物の散布と大きな掘り込みが確認された。下段では若干の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。旧土地所有者によると下段にある送電鉄塔の工事の際に削平したとのことで、この段差もその時に掘り込んだ跡であるとのことであった。

このため、調査は上段に限定して行うこととし、最終的には溝跡2条と土坑1基が検出された。

この後、今回の調査区に隣接して資材搬入路の掘削が予定されていることが判明し、これも上段部分(約15m)について調査することとした。調査の結果、竪穴住居跡の一部と土坑7基が検出された。

今回の調査区は、同時に調査が行われていた県道予定地に隣接しており、遺構の連続性が確認された調査となった。

(白鳥)

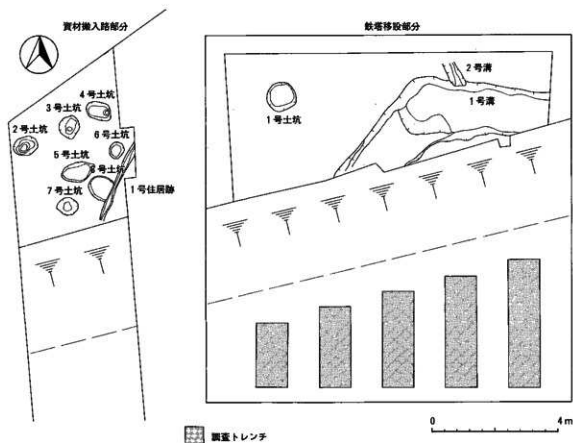


図3 沖館A線No.1鉄塔遺構配置図

第2節 検出遺構

1 鉄塔部分

第1号溝跡 (図4)

調査区上段の東側に位置する。地山面で黒褐色土の範囲として確認した。

屈曲部の東側で第2号溝跡と重複しているが新旧関係は不明である。

平面形は「く」の字状に屈曲した弧状を呈している。内部は2段になっており、西側部分は浅く、東側は深い。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は上段は平坦で南西に向けやや傾斜しており、下段も同様に平坦であるが、傾斜は東側に向かっている。

確認部分の幅は、開口部は上段、下段ともあまり差はなく、約160～180cmである。底面は上段が約140cm、下段が120～140cmで下段がやや狭い。深さは、上段が30cm～40cm、下段が50cm～75cmである。

堆積土は、10層に分層できた。黒褐色土及び褐色土が主体であり、全体にしまりがある。混入物はローム粒、炭化物粒等であるが、部分的に砂のブロックも混入している。

堆積土中からは土師器及び須恵器の破片が出土しており、底面近くからは須恵器大甕の口縁部も出土している。

調査区南側が大きく掘削されているため、全体形は確認できないが、地形的には緩斜面に移行する地点であることから、本溝跡は構築当時の斜面下位に向かって傾斜していたものと考えられる。

また、重複関係にある第2号溝跡は、同時期に調査を行った県道改良工事部分にその延長が確認されていることから、本溝跡に注ぐよう構築された可能性も考えられる。

第2号溝跡 (図4)

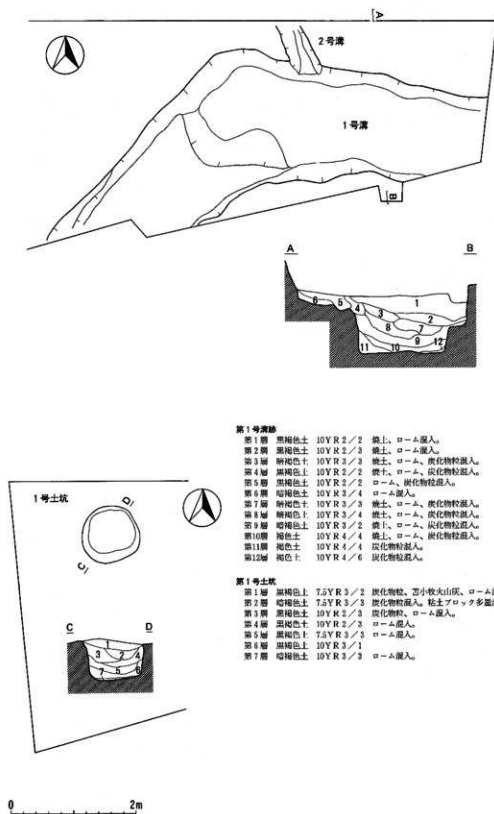
調査区の上段に位置し、第1号溝跡と重複する。新旧関係は不明であるが、同時存在の可能性も考えられる。確認部分の長さは80cm、幅40cm、深さは約30cmで南側(第1号溝跡)に傾斜している。

第1号土坑 (図4)

調査区上段北西に位置する。平面形状は楕円形で長径95cm、短径93cm、深さ62cmである。

壁はほぼ垂直で、底面はほぼ平坦である。堆積土は7層に分層できた。黒褐色土を主体としており、ローム粒等が混入している。

平安時代の所産と考えられる。



第1号溝跡

- | | | | |
|------|------|-----------|----------------|
| 第1層 | 黒褐色土 | 10Y R 2/2 | 壤土、ローム混入。 |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10Y R 2/3 | 壤土、ローム混入。 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/3 | 壤土、ローム、炭化物粒混入。 |
| 第4層 | 黒褐色土 | 10Y R 2/2 | 炭土、ローム、炭化物粒混入。 |
| 第5層 | 黒褐色土 | 10Y R 2/2 | ローム、炭化物粒混入。 |
| 第6層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/4 | ローム混入。 |
| 第7層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/3 | 壤土、ローム、炭化物粒混入。 |
| 第8層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/4 | 壤土、ローム、炭化物粒混入。 |
| 第9層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/2 | 炭土、ローム、炭化物粒混入。 |
| 第10層 | 褐色土 | 10Y R 4/4 | 壤土、ローム、炭化物粒混入。 |
| 第11層 | 褐色土 | 10Y R 4/4 | 炭化物粒混入。 |
| 第12層 | 褐色土 | 10Y R 4/6 | 炭化物粒混入。 |

第1号土坑

- | | | | |
|-----|------|------------|--------------------|
| 第1層 | 黒褐色土 | 7.5Y R 3/2 | 炭化物粒、微小火山灰、ローム混入。 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 7.5Y R 3/3 | 炭化物粒混入。粘土ブロック多量混入。 |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10Y R 2/3 | 炭化物粒、ローム混入。 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10Y R 2/3 | ローム混入。 |
| 第5層 | 黒褐色土 | 7.5Y R 3/3 | ローム混入。 |
| 第6層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/1 | |
| 第7層 | 暗褐色土 | 10Y R 3/3 | ローム混入。 |

図4 第1号溝跡・第1号土坑

2 搬入路部分

第1号整穴住居跡 (図5)

調査区南東隅に位置する。周溝だけの確認である。確認した周溝部分の長さは260cm、幅12cm～22cmで、深さは10cm～16cmである。

調査区端の壁面観察では、本住居跡の掘り込みは約80cmと深い。堆積土は6層に分層できた。暗褐色土を主体としており全体にローム粒が混入している。

本住居跡の床面からは遺物は出土していないが、堆積土中からは土師器片が出土しており、平安時代の所産と考えられる。

第2号土坑 (図5)

調査区上段北西隅に位置する。平面形状は楕円形で長径78cm、短径60cm、深さ42cmである。

断面形状は不整なU字形で、底面は湾曲している。堆積土はローム主体の黄褐色土1層であるが、確認時は苦小牧火山灰が上部に堆積していた。

平安時代の柱穴と考えられる。

第3号土坑 (図5)

調査区上段北側に位置する。平面形状は不整な楕円形で長径73cm、短径62cm、深さ18cmである。

壁はほぼ垂直で、底面は東側がやや高いがほぼ平坦である。堆積土は6層に分層できた。暗褐色土及び褐色土を主体としており、ローム粒・炭化物粒等が混入している。確認時は上部に小ブロックの苦小牧火山灰が堆積していた。

平安時代の柱穴と考えられる。

第4号土坑 (図5)

調査区上段北東隅に位置する。平面形状は長楕円形で長径84cm、短径53cm、深さ36cmである。

壁はほぼ垂直で、底面はほぼ平坦である。東側に深さ10cmほどの小ピットが穿たれている。堆積土は2層で、暗褐色土を主体とし、炭化物が混入している。

平安時代の所産と考えられる。

第5号土坑 (図5)

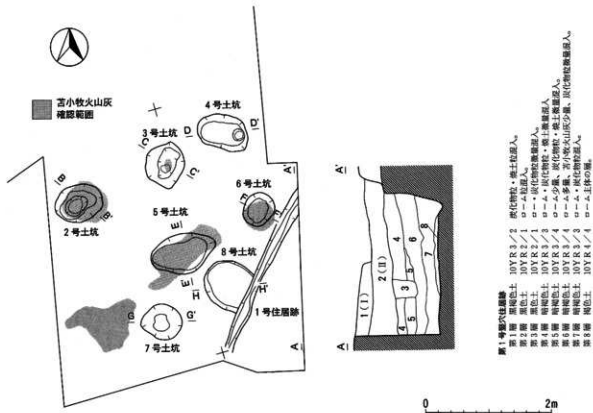
調査区上段中央に位置する。平面形状は不整な楕円形で長径106cm、短径53cm、深さ41cmである。

断面形状はナベ底状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層できた。褐色土及び黄褐色土を主体としており、ローム粒等が混入している。第1層は苦小牧火山灰であり、確認時には広範囲に本土坑を覆っていた。

平安時代の所産と考えられる。

第6号土坑 (図5)

調査区上段東側に位置する。平面形状はほぼ円形で長径54cm、短径46cm、深さ72cmである。



第2号土坑
第1層 黄褐色土 10YR 5/8 rome上体の層、炭化物微量混入。

第3号土坑
第1層 ぶい黄褐色土 10YR 5/4 火山灰主体の層。
第2層 褐色土 10YR 4/4 炭化物微量混入。
第3層 黄褐色土 10YR 2/2 rome少量、炭化物微量混入。
第4層 褐色土 10YR 4/4 炭化物微量混入。
第5層 暗褐色土 10YR 3/3 romeブロック混入。
第6層 褐色土 10YR 4/4 rome粒混入。降下火山灰混入。

第4号土坑
第1層 暗褐色土 10YR 4/6 rome、炭化物微量混入。
第2層 暗褐色土 10YR 3/3 rome混入。

第5号土坑
第1層 ぶい黄褐色土 10YR 5/4 吉小牧火山灰。
第2層 褐色土 10YR 4/4 romeブロック・火山灰・炭化物粒混入。
第3層 ぶい黄褐色土 10YR 6/4 rome主体の層。炭化物粒微量混入。

第6号土坑
第1層 暗褐色土 10YR 3/4 吉小牧火山灰との混入。炭化物粒微量混入。
第2層 暗褐色土 10YR 3/4 rome・炭化物微量混入。

第7号土坑
第1層 暗褐色土 10YR 3/3 rome、炭化物微量混入。
第2層 褐色土 10YR 4/2 rome多量、炭化物粒微量混入。
第3層 褐色土 10YR 4/4 rome多量混入。
第4層 暗褐色土 10YR 3/4 rome粒混入。

第8号土坑
第1層 褐色土 10YR 4/4 rome、炭化物混入。

図5 第1号竪穴住居跡・第2～8号土坑

壁はほぼ垂直で、底面はやや中央が低いがほぼ平坦である。堆積土は3層に分層できた。暗褐色土を主体としているが、第1層は苫小牧火山灰との混合上で、第3層は苫小牧火山灰の層である。また、確認時には上部に苫小牧火山灰が堆積していた。

平安時代の柱穴と考えられる。

第7号土坑 (図5)

調査区上段南側に位置する。平面形状は不整な円形で長径65cm、短径56cm、深さ63cmである。

断面形状はU字形で、底面は中央が低い。堆積土は4層に分層できた。暗褐色土を主体としており、ローム粒及び炭化物粒が混入している。

平安時代の柱穴と考えられる。

第8号土坑 (図5)

調査区上段南東隅に位置する。南東部は第1号住居跡に切られているが、平面形状は楕円形と考えられる。長径の残存部は65cm、短径73cm、深さ42cmである。

断面形状はナベ底状を呈するものと考えられる。堆積土は褐色土の1層でローム粒等が混入している。

平安時代の所産と考えられる。(白鳥)

第3節 出土遺物

本調査区は、鉄塔用地部分と資材搬入路部分の2箇所に分かれている。鉄塔用地部分では、表土下及び第1号溝跡覆土中から土師器・須恵器片が出土している。また、少量であるが、縄文時代及び弥生時代の土器片も出土している。遺物の量はデスクトレーで3箱程度と少なく、ほとんどが小破片であった。資材搬入路部分からは土師器・須恵器・縄文時代の小破片が少量出土している。

1 平安時代の遺物 (図6)

1～9は第1号溝跡から、10～13は遺構外から出土した遺物である。

1はロクロ使用の坏で底外面には回転糸切り痕が見られる。

2はやや小型の甕の口縁部で、胴部寄りの器壁はほぼ垂直で、口縁が小さく外反している。内外面ともヘラナデで整形されており、外面は縦位方向に内面は横位方向に痕跡が確認される。口縁部は横位方向の指ナデである。

3は甕の底部片で、底部から大きく外反し立ち上がっている。下位はヘラケズリの痕跡が見られる。底外面2は砂粒痕が確認された。

4はロクロ使用の須恵器坏の破片である。5は須恵器大甕の口縁部破片で底面からの出土である。肩部には叩き目が見られる。

6・7は須恵器大甕の肩部破片で、外面には叩き目が、内面には、鳥足状もしくは綾杉状のあて具痕が観察される。

8は甕の底部片、9は底部直上の破片である。

10は土師器甕の上半部で最も大きく接合した破片である。外面は縦位方向に内面は横位方向のナデ

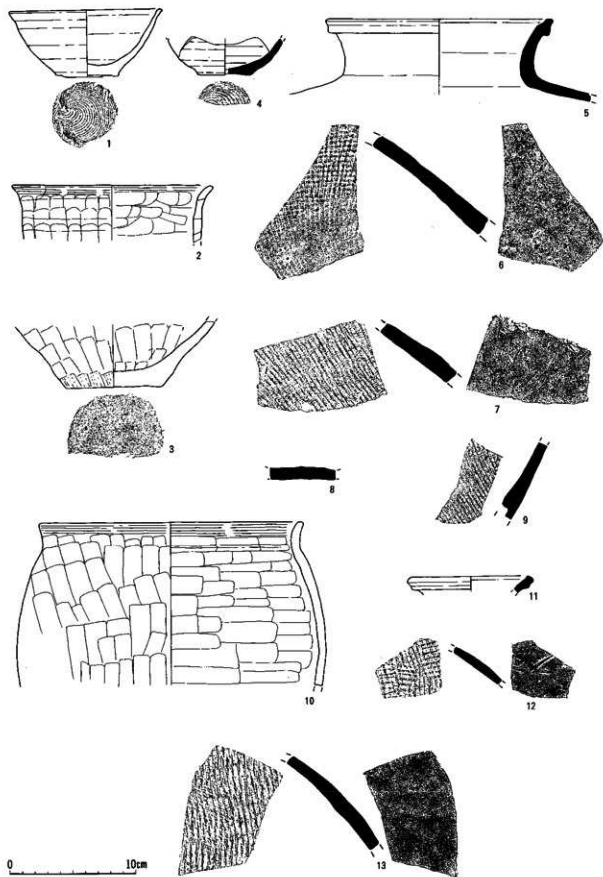


図6 平安時代の遺物

が見られる。

11は須恵器の小型甕または壺の口縁部片で、12・13は甕の肩部片である。外面には叩き目が、内面にはあて具の痕跡が見られる。(白鳥)

2 弥生時代の遺物 (図7)

1・2は口縁部破片で、縦方向の縄文地に横位方向に展開する曲線文を施しており、深鉢形を呈する。

11は、曲線の文様構成で磨消縄文を施文している。

文様は、弧状文(4・9)、縦位文(7)、斜位状文(12)を施文している。

14は、縄文地文の粗製土器で鉢形であり、16は鉢形土器で、口唇部上面に連続した刻みを有し、内面に一条の横位沈線を施文している。

器内外面にスス状炭化物の付着例が多い。

3 縄文時代の遺物

破片が30点程出土しているが、ほとんど胴部の小破片であるため、図示しなかった。(成田)

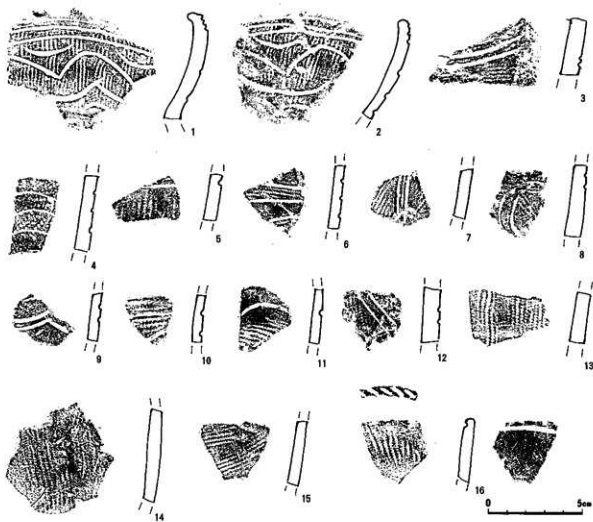


図7 弥生時代の遺物

表1 出土遺物観察表(平安時代)

図版番号	種類	器種	出土地点	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	備考
図6-1	土師器	坏	1溝	12.2	5.3	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
2	土師器	甕	1溝	(15.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
3	土師器	甕	1溝				ヘラナデ、ケズリ	ヘラナデ	砂粒痕
4	須恵器	坏				(4.2)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
5	須恵器	甕	1溝	(18.0)			ロクロ、叩き目		自然軸
6	須恵器	甕	1溝				叩き目	当て具	自然軸
7	須恵器	甕	1溝				叩き目	当て具	自然軸
8	須恵器	甕?	1溝						底部
9	須恵器	甕?	1溝				叩き目		底部直上
10	土師器	甕		(20.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
11	須恵器	甕		(10.0)			ロクロ	ロクロ	自然軸
12	須恵器	甕					叩き目	当て具	
13	須恵器	甕					叩き目	当て具	

表2 出土遺物観察表(弥生時代)

図版番号	出土区	層位	器種	部位	文 様 等	備 考
図7-1	北側	I	深鉢	口頸	二又状突起 縄文(LR)地に、横位・弧状文(沈線)	2と同一個体
2	北側	I	深鉢	口頸	縄文(LR)地に、横位・弧状文(沈線)	1と同一個体
3	北側	I	深鉢	口頸	縄文(LR)地に、斜位の沈線	
4		I	深鉢	胴	弧状文の磨消縄文(LR)	
5	北側	I	鉢	口頸	縄文(LR)と二条の横位沈線	スス状炭化物付着
6	1溝	フク土	鉢	胴	横位・斜位状の磨消縄文(RL)	スス状炭化物付着
7	北側	I	鉢	胴	縄文(LR)地に縦位の沈線	
8	北側	I	鉢	口頸	弧状文の磨消縄文(RL)	
9	1溝	フク土	鉢	胴	二条の弧状文(沈線)	
10	北側	I	鉢	口頸	縄文(RL)横位と斜位の沈線	
11	1溝	フク土	鉢	胴	弧状文の磨消縄文(RL)	
12	1溝	フク土	鉢	胴	縄文(RL)横位と二条の斜位沈線	
13	北側	I	鉢	胴	縄文(RL)	スス状炭化物付着
14	1溝	底	鉢	胴	縄文(LR)	
15		I	鉢	胴	縄文(LR)	
16	1溝	フク土	鉢	口頸	口唇部に連続する刻み 縄文(RL) 内面に一条の沈線	

第三章 沖館A線No.2 鉄塔

第1節 調査の経過

地番：青森市高田字朝日山398、外 対象範囲：10.7m四方

調査区域は耕作を休止した畑地で、調査時には草地となっていた。調査区の北側には水路が存在し、北西隅に一部がかった。この水路は農業用水路としてはすでに使用されていないようであったが、調査中の湧水を懸念してこの部分の調査は行わないこととした。

調査区が狭く排上置き場がないため、東側半分から着手し、西側を排上置き場とした。調査は表土剥ぎから行い、地層ごとに掘り下げていった。黒褐色土中からは平安時代及び縄文時代の土器片が出土したが、ほとんどが細片であった。地山面で東側に黒褐色土の堆積が確認され精査を行ったが、覆土中に碎石及び部分的に圧縮された地山の粘土ブロックと黒褐色土の混合土の混入がみられ、攪乱を受けている事が判明した。

最終的には地山への掘り込みが確認された。方形または長方形のコーナー部と考えられる形状であったが、底面に連続した重機のキャタピラまたは爪の痕跡が見られたことから、近・現代の耕作による攪乱の可能性が高く、古代の遺構ではないと判断した。

西側は、調査の終了した部分に排土を移動し、トレンチを2本設置した。表土下20cmほどで地山を確認し、遺物の出土もないことから、これ以上の調査は不要と考え、調査を終了した。(白鳥)

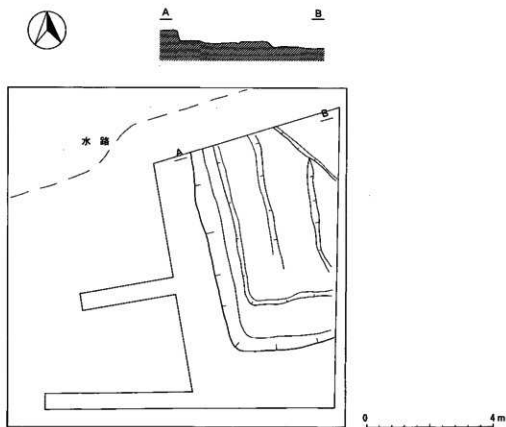


図8 沖館A線No.2 鉄塔調査区域図

第2節 出土遺物

1 平安時代の遺物 (図9)

土師器・須恵器片がデスクトレーで2箱分出土している。いずれも小破片で、土師器片は甕の胴部片がほとんどのため、図示できたものは須恵器の4点である。

1はロクロ使用の須恵器環で、内外面に縦位に火漉痕が見られる。また、口唇部外面には横位の痕跡も見られた。

2～4は須恵器大甕の破片で、2・3は肩部破片、4は底部近くの破片である。外面には叩き目が見られ、4は内面に鳥足状もしくは綾杉状のあて具痕が見られる。(白鳥)

2 縄文時代の遺物 (図10)

出土した土器は、胴部破片のみであり、焼成は悪く、器表面は胎土の砂粒が浮き出てザラザラしており滑らかでない。

文様は、単節縄文と附加縄文(4・5)を施している。

8は、器厚が薄く、スス状炭化物が付着している。

時期は、1～7が縄文時代前中期、8が縄文時代晩期に比定できると思われる。(成田)

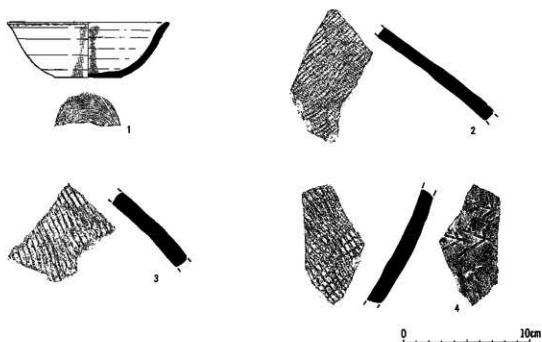


図9 平安時代の遺物

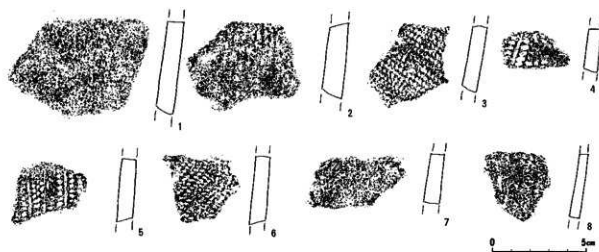


図10 縄文時代の遺物

表3 出土遺物観察表（平安時代）

図版番号	種類	器種	出土地点	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	備考
図9-1	須恵器	坏		12.8	4.4	(5.2)	ロクロ	ロクロ	火漚
2	須恵器	甕					叩き目		
3	須恵器	甕					叩き目		
4	須恵器	甕					叩き目		底部直上

表4 出土遺物観察表（縄文時代）

図版番号	出土区	層位	器種	部位	文 種 等	備 考
図10-1			深鉢	胴	縄文（R L）	スス状炭化物付着
2			深鉢	胴	縄文（R L）	スス状炭化物付着
3			深鉢	胴	縄文（R L）	
4			深鉢	胴	附加縄文	
5			深鉢	胴	附加縄文	
6			深鉢	胴	縄文（L R）	
7			深鉢	胴	縄文（L R）	
8			鉢	胴	縄文（R L）	スス状炭化物付着

第IV章 五所川原線No.1鉄塔

第1節 調査の経過

地番：青森市高田字朝日山418、外 対象範囲：14m×11m

調査区域は、平坦な畑地内にあり、耕作中のため排土置場などの制約があった。また、南西側上段に50cm程の段差でもう一枚の畑があり、この部分は耕作土の流失を防ぐため調査できなかった。

調査は、当初、排土置場場所の制限から南半分を調査し、調査区北側に排土を置いた。表土除去後、白頭山一苫小牧火山灰がブロック状に検出され、平安時代の遺構の存在が推察された。

南側を地山直上まで掘り下げた時点で、畑地の土地所有者の好意により、休耕部分に排土の仮置きが可能となり、調査はほぼ全面を対象とすることができた。

遺構は、西側では表土下20～30cm程で確認が可能であったが、地山は東側に傾斜しており50cm程掘り下げても遺構確認はできなかった。堆積土中からは遺物が出土していたが、東側では遺構との関係把握できなかった。調査期間の終了間近になり遺構確認が急がれたが、数度の降雨のため、周囲からの雨水及び浸透水の湧水のため、調査は困難となった。このため、遺物の取り上げは各地点ごとに一括して行うこととし、遺構精査を優先することとした。

調査終了時まで東側部分は湧水に悩まされたが、遺構精査を無事終了し、埋め戻しを行い、期間内に調査を終了することができた。

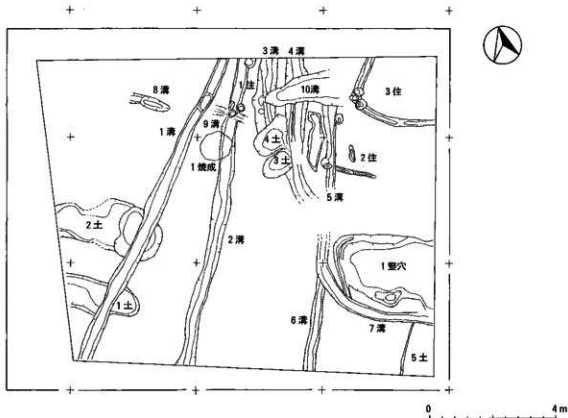


図11 五所川原線No.1鉄塔遺構配置図

今回の調査は、ごく限られた範囲であったが、朝日山(1)遺跡と、同時に調査を行っていた県道予定地との間にも、集落が途切れずに存在していることを証明する良い結果を得ることができた。

(白鳥)

第2節 検出遺構

1 竪穴住居跡

調査区北東部に3軒の竪穴住居跡と考えられる痕跡を検出した。いずれも残存状態は非常に悪く、形状及び規模を知り得るものはない。また、畑地の中央部を調査したため、最も地山の低いこの範囲には常に湧水のための湿潤状態が続き、上部からの遺構範囲の確認ができなかった。このため、地山を掘り込んでいる部分だけの確認となった。

第1号竪穴住居跡 (図12)

調査区北寄り中央に位置している。残存状態は非常に悪くごく一部分だけの確認であるが、柱穴及びカマドの残存部と考えられる粘土塊から住居跡とした。全体形状及び規模は不明である。

第2号溝跡、第3号溝跡と重複しているが新旧は不明である。

柱穴は4個確認した。No.1～No.3は南西隅に位置する柱穴と考えられる。No.4は配置から本住居跡ものと考えたが、掘り込み面がより高い部分からの可能性もあり断定できない。また、第2号住居跡のNo.4とした柱穴は、本住居跡の柱穴の可能性も考えられる。各柱穴の規模は、No.1-27×25×21(長径×短径×深さcm、以下同)、No.2-27×22×10、No.3-36×16×13、No.4-27×26×30である。

カマドの一部と考えた2個の粘土ブロックは、確認時は性格が不明であったが、柱穴との関係から南壁に設置されたカマドの袖部の可能性が高い。地山上の黒褐色土に粘土を盛っており、一部は被熱のため焼土化している。

周溝は第1号溝跡と直交する短い溝の一部がその可能性があるが、断定できない。

遺物は、土師器・須臾器の破片が出土しているが、重複が著しく本住居跡のものと断定し得るものはない。



図12 第1号竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡 (図13)

調査区北東部に位置している。周溝の一部及び柱穴のみが残存していた。全体形状及び規模は不明である。第5号溝跡と重複しているが新旧は不明である。

柱穴は4個確認したが、No.4は第1号竪穴住居跡の柱穴の可能性も考えられる。No.1・2は周溝内に存在し、No.3は住居の隅に位置すると考えられる。各柱穴の規模は、No.1-33×9×5(長径×短径×深さcm、以下同)、No.2-37×13×9、No.3-38×27×9、No.4-36×22×6である。

周溝は、南西の一部分だけが残存していた。幅は15cm程で、深さは2cm~4cmで東側が若干深い。壁、床面、堆積土、カマド等は確認できなかった。

出土遺物は、調査区の北東部から段ボール箱1個分程の土師器・須恵器が出土しているが、本住居跡のものとは断定できるものはない。

残存状態は非常に悪いが、本住居跡の時期は平安時代と考えられる。

第3号竪穴住居跡 (図13)

調査区の北東隅に位置する。周溝及び柱穴だけが残存していた。全体形状及び規模は不明である。他の遺構との重複関係は認められない。

柱穴は3個確認した。いずれも南西隅の周溝内に存在する。各柱穴の規模はNo.1-36×35×20(長径×短径×深さcm、以下同)、No.2-28×20×15、No.3-35×24×16である。

周溝は、南側は約280cmが残存している。幅は26cm~22cmでやや不自然な弧状を呈している。西側は約140cmが確認され、調査区外に延伸している。幅は28cm~23cmで、深さは、1cm~9cmである。

壁、床面、カマド等は確認できなかった。

堆積土は周溝部分で1層が確認できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒、炭化物粒を混入している。出土遺物は第2号住居跡同様に本住居跡のものとは断定できるものはない。

残存状態は非常に悪いが、本住居跡の時期は平安時代と考えられる。

また、第4号溝跡もしくは第3号溝跡が外周溝として付属する可能性が考えられる。

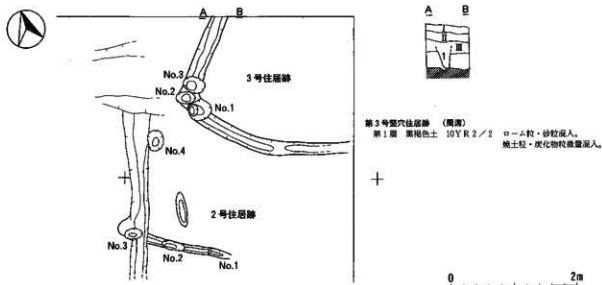


図13 第2・3号竪穴住居跡

2 土坑

第1号土坑 (図14)

調査区南西隅に位置する。西側は畑地の境界となる段差があるため、耕作土の流出を防ぐために調査できなかった。

第1号溝跡と重複しており、本土坑が古い。

形状は不整な楕円形で、底面は東側に傾斜している。確認部分の長さは240cm、最大幅は108cmである。また、深さは15cm～23cmである。

堆積土は西側で4層に分層できた。黒褐色土を基調にし炭化物粒などが混入している。また、土師器片が少量出土している。

時期は平安時代と考えられる。

第2号土坑 (図14)

調査区西側中央寄りに位置する。西側部分は、第1号土坑と同様に調査できなかった。

第1号溝跡と重複しており、本土坑が古い。

形状は不整な楕円形で、東側が掘り鉢状にくぼんでいる。また、溝跡との重複部分に焼土が検出された。形状的には、朝日山遺跡での他調査区域に見られる住居跡を巡る外周溝の末端部に類似している。

確認部分の長さは350cm、最大幅は東側のくぼみ部分で165cmである。また、深さは10～25cmである。

堆積土は西側で2層に分層できた。黒褐色土を基調にし、ローム粒などが混入している。

遺物は土師器・須恵器片が出土している。

時期は平安時代と考えられる。

第3号土坑 (図15)

調査区中央北東寄りに位置する。第4号土坑と接し、第3号・第4号溝跡と重複している。第4号土坑との新旧は不明であるが、本土坑は第3号・第4号溝跡より新しいと考えられる。

形状は楕円形であるが、第4号溝跡と接する部位からは不明である。残存する長径110cm、短径72cm、深さは15cmである。

堆積状況は確認できなかったが、調査中では、黒褐色土を基調として、砂粒及びローム粒が混入していた。

上部及び周囲からは土師器・須恵器片が出土しているが本土坑に伴うものと断定できるものはない。時期は、重複関係から平安時代と考えたい。また、第4号土坑との同時並びに同一遺構の可能性も考えられる。

第4号土坑 (図15)

調査区中央北東寄りに位置する。第3号土坑と接し、第3号・第4号溝跡と重複している。第3号土坑との新旧は不明であるが、本土坑は第3・4号溝跡より新しいと考えられる。

形状は不整な楕円形で、北東側に若干ふくらむ。また第4号溝跡と接する部位からは不明である。

残存する規模は、長径100cm、短径82cm、深さは20cmである。

堆積状況は確認できなかったが、調査中では、第3号土坑と同様に、黒褐色土を基調として、砂粒及びローム粒が混入していた。

上部及び周囲からは土師器・須恵器片が出土しているが、本土坑に伴うものと断定できるものはない。時期は、重複関係から平安時代と考えたい。

第5号土坑 (図18)

調査区の南東隅に位置する。ごく小範囲の段差を持つ遺構で全体形や規模は不明である。

第7号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

確認面からは10cmの段差を持っており、底面には凹凸が多く見られる。住居跡の床面の掘り方とも考えられるが、小規模のため土坑として扱った。

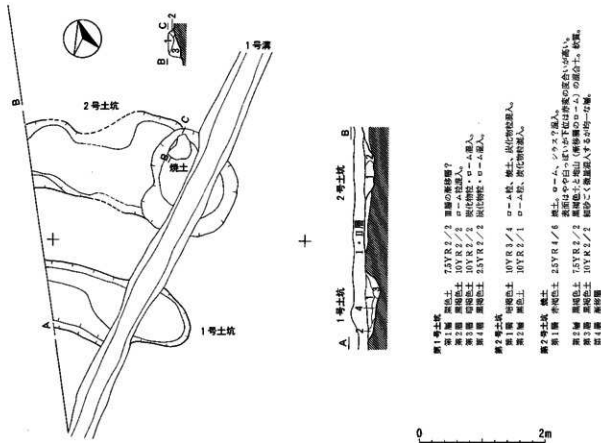


図14 第1・2号土坑

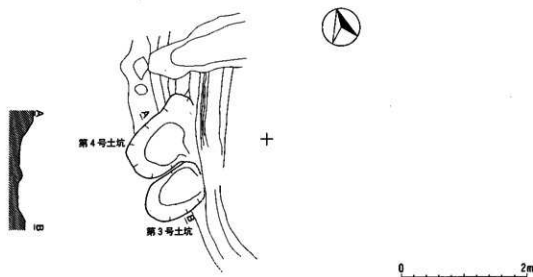


図15 第3・4号土坑

3 溝跡

ごく小規模なものまで含め、10条の溝跡を確認した。このほかに住居跡の周溝と考えられるものを2条(第2・3号竪穴住居跡)確認している。

※溝の集中部のセクション図は図17に一括記載している。

第1号溝跡 (図16・17)

調査区の南西端から北側中央部まで直線的に伸びており、両端部は、調査区外にも伸びている。

第1号・第2号土坑と重複しており、本溝跡が両遺構より新しい。また、第9号溝跡との交差を推定される部分には柱穴状のくぼみが検出されている。

確認した長さは10.5mあり、幅は35cm～60cmで北側がやや狭くなっている。深さは15cm～35cmで、傾斜方向は南西から北東へ向かっている。

堆積土は、南寄りでは4層に分層された。黒褐色土を基調としており、砂粒が混入している。

堆積土中より土器器・須恵器片が出土している。時期は平安時代と考えられる。

第2号溝跡 (図16・17)

調査区のほぼ中央を南北にやや蛇行し、両端部は調査区外に伸びている。

第1号焼成遺構、第1号竪穴住居跡の柱穴及び第9号溝跡と重複している。第1号焼成遺構は、本溝跡の上部で確認されており本溝跡より新しく、第1号住居跡の柱穴は本溝跡より古い。第9号溝跡との新旧は不明である。

確認した長さは9.8mであり、幅は40cm～60cmで部分的に異なる。深さは15cm～35cmで、傾斜方向は南から北へ向かっているが中央北寄りやや深くなっている。

堆積土は、中央付近では4層に分層された。黒褐色土を基調としており、砂粒が混入している。

堆積土中より土器器・須恵器片が出土している。時期は平安時代と考えられる。

第3号溝跡 (図17)

調査区の北側、中央やや東寄りに位置し、北側部分は調査区外に延びている。

第3号・第4号土坑、第10号溝跡と重複し、本溝跡が最も古い。また、第3号・4号土坑部分で第4号溝跡と接していると考えられる。

形状はやや弧状を呈しており、確認した長さは240cm、幅は50cm～65cmである。深さは11cm～24cmで北方向に傾斜している。

堆積土は3層に分層できた。黒褐色土を基調としており、やや砂っぽい感がある。

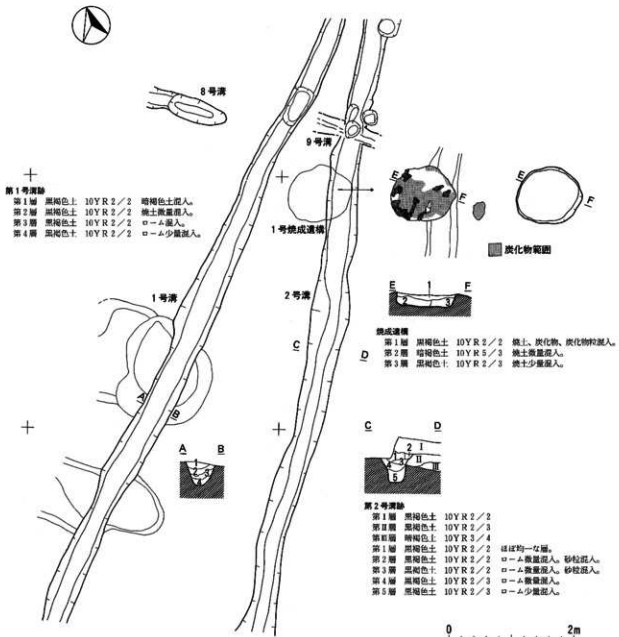


図16 第1・2・8・9号溝跡・第1号焼成遺構

遺構が密集していることから、本溝跡に伴うと断定できる遺物はないが、時期は平安時代と考えられる。また、朝日山遺跡の他の調査区で確認されているように住居跡の外周溝（第4号溝跡）の作り替えの可能性も高い。土層観察によると第4号溝跡の覆上を本溝跡が切り込んでいる。

第4号溝跡（図17）

調査区北側、中央やや東寄りに位置する。北側部分は調査区外にのびているが、南側は確認できなかった。

第3号・第4号土坑及び第10号溝跡と重複しており、本溝跡が最も古い。また、第3・4号土坑部分で第4号溝跡と接していると考えられる。

形状は弧状を呈しており、確認した長さは4.6m、幅は一定しておらず50cm～70cmである。深さは7cm～20cmで北側に傾斜している。

堆積土は3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒が混入している。

遺構が密集していることから本溝跡のものと断定できる遺物はないが、時期は平安時代と考えられ、第3号竪穴住居跡の外周溝であった可能性が高い。

第5号溝跡（図17）

調査区の北側に位置し、南北に直線的に延びる。両端部は途切れて不明である。

第2号住居跡及び第10号溝跡と重複している。本溝跡は第10号溝跡より古い、第2号住居跡との新旧は不明であり、第2号住居跡の周溝との区切りも不明瞭である。

確認した長さは255cm、幅は25cm～45cmである。深さは4cm～12cmで南側に傾斜している。

本溝跡に伴うものと断定できる遺物はないが、周囲からは土師器片等が出土している。

本溝跡は、南側に位置している第6号溝跡もしくは第7号溝跡と同一遺構の可能性が考えられるが、両遺構のいずれかは不明である。

第6号溝跡（図18）

調査区南東側に位置し、南北に直線的に延びている。南側は調査区外に延びているが、北側は途切れていて確認できなかった。

第7号溝跡と重複しているが新旧関係は不明である。確認部分の長さは300cm、幅は概ね35cmであり、深さは5cm～10cmで北側に傾斜している。

本溝跡から出土した遺物はないが、周囲からは土師器片などが出土している。

途中で途切れているが第5号溝跡とつながる可能性が考えられる。

第7号溝跡（図18）

調査区南東隅に位置し、東側は調査区外に延びる。北側は途切れており確認できなかった。

第6号溝跡、第1号竪穴遺構、第5号土坑と重複している。いずれの遺構との新旧関係も不明である。形状的には弧状を呈するが、屈曲部以外は直線的であり隅丸方形の一隅のようでもある。

確認部分の幅は屈曲部が45cmで最も広く、東端部は30cmである。深さは4cm～12cmで東側に傾斜し

ている。

周辺部からは土師器・須恵器などが多く出土しているが、本遺構の遺物と断定できるものは図示した須恵器片1点である。

形状からは隅丸方形の住居跡に付随する周溝とも考えられる。

第8号溝跡 (図16)

調査区北西部に位置する。溝跡とするには非常に短い形状から溝跡とした。東側に長楕円形はや深い部分の確認されている。

確認部分の長さは130cmで、幅は35cm、深さは6cm～13cmである。

第9号溝跡とつながる可能性も考えられる。

第9号溝跡 (図16)

調査区北側の中央部に位置する。

第2号溝跡及び第1号住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。

確認部分の長さは100cmで、幅は25cm、深さは4cm～9cmである。

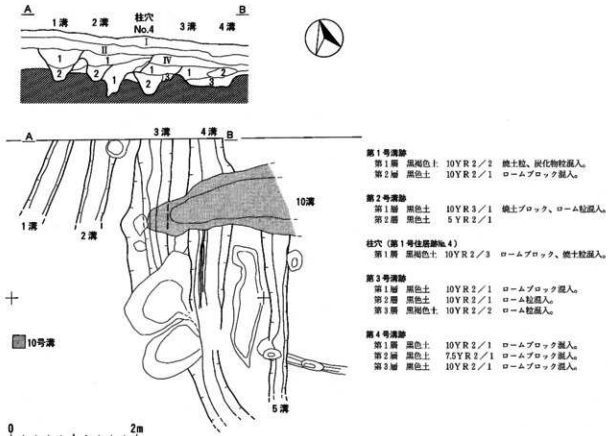


図17 第3・4・5・10号溝跡

第10号溝跡 (図17、スクリーントーン部分)

調査区の北側、やや東寄りに位置する。西端部は立ち上がりがほぼ確認できたが、東側は途切れていて確認できなかった。

第3号・第4号溝跡と重複しており、本溝跡が最も新しい。

確認部分の長さは215cmで、幅は東側の最大部分で110cmである。深さは5cm～35cmである。

図示できなかったが、堆積上は黒褐色土を基調としており、ローム粒・砂粒が混入していた。また、遺構が密集していることから本溝跡のものと断定できる遺物はないが、土師器・須恵器片が出土している。平安時代の遺構と考えたいが断定できない。

4 焼成遺構

第1号焼成遺構 (図16)

調査区の北側、ほぼ中央に位置する。第2号溝跡の上部で炭化物の範囲として確認した。

炭化物は10cm程度の炭化材と1cm程度の炭化材片及び炭化物粒で、ほぼ確認面全体に広がっていた。

下部の構造は、黒褐色土から掘り込まれたナベ底状の土坑で、堆積土は黒褐色土が主体となっており、砂質である。焼土は含まれていなかった。

確認面の形状はほぼ円形で、長径105cm、短径88cmで、深さは20cmである。

本遺構内からの出土遺物は炭化物だけであり、時期を特定する材料に欠けるが、ほぼ同一面からは土師器・須恵器が出土しており平安時代と考えたい。

5 その他の遺構

第1号竪穴遺構 (図18)

調査区南東部に位置している。第7号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

不整形形で東側は調査区外に延びている。中央部が一段低くなっているが底面は起伏が多い。また、自然礫が多く出土している。確認部分の長軸は375cmで、短軸は225cmである。調査区端の土層では、底面とした直上はローム主体の礫混じりの土が堆積していた。

第7号溝跡が住居跡の周溝の可能性があることから考えれば、本遺構は住居跡の掘り方の可能性も出てくるが推察の域を出ない。

本遺構の範囲からは、土師器片などが出土している。

(白鳥)

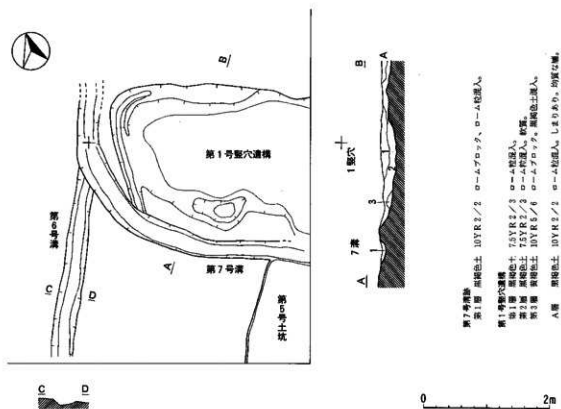


図18 第7・8号溝跡、第5号土坑、第1号竪穴遺構

第3節 出土遺物

調査区全体にわたりトロボ箱3個分の遺物が出土したが、北東側は遺構が密集しており、どの遺構から出土したのか特定できないものが多い。また、畑地の中央を掘削していることから、数度の降雨による浸透水が湧出し、遺構確認を優先させたことから遺構とのセット関係の把握がより不明となってしまった。このため、確実に遺構の覆土中からの出土したものと認定できたもの以外は、遺構外出土として報告する。ただし、観察表中に記載した出土地点は大まかに該当する遺構と重複するので参照していただきたい。また、第7号溝跡及び第1号竪穴遺構の存在する南東側からは遺物が集中して出土していた。

1 平安時代の遺物 (図19～22)

(遺構内出土遺物)

1～3は第1号溝跡、5～14は第2号溝跡、4は第7号溝跡からの出土遺物である。

1～3は須恵器片で、1はロクロ成形による小型甕の破片である。2・3は甕の破片で、表面には叩き目が見られ、2は内面に烏足状もしくは綾形状のあて具痕が見られる。4も甕の破片で外面に叩き目と内面にあて具の痕跡が見られる。

5・6はロクロ使用の土師器環で、5はやや直線状に、6は湾曲気味の器形である。7・8は土師器甕で、7は器外面に肩部は縦位に胴部は横位にヘラナデの痕跡が見られる。8は概ね斜位方向のナデ付けが行われており、ともに内面は斜位方向のナデが見られる。

9はロクロ使用の須恵器環で、底部直上にナデの痕跡が見られる。また、内外面に火燂痕が確認された。10は叩き目のない甕または壺の肩部破片である。11～14は大甕の肩部破片でいずれも外面に叩き目が認められる。

(遺構外出土遺物)

土師器

15～17は内面黒色処理による土師器環で、17は高台風の底部破片である。18～27はロクロ使用の環で、19・21は口唇部がやや外反しており、19は底辺部にナデの痕跡が認められる。

28～38は甕でロクロでの成形は行われていない。28～30は小型の甕で、口縁部の形状は類似している。ともに外面は胴部は縦位及びやや斜位のヘラナデと、口縁部は横位のナデで整形されている。内面は29・30は胴部中位から縦位のナデ付けが行われている。31～35は長胴甕の口縁部で、31の口唇部が平端に整形されているのを除いて、他はほぼ同様の口縁部形状を呈しており、器面の調整法も基本的には小型甕のものと同様である。36～38は底部破片で、37は底部直上はケズリ及びナデによる整形痕が見られ、38の底外面に木葉痕が見られる。

39は、土師器と考えられるごく薄く扁平な破片で、器形等は不明である。外面に樹脂または墨書と推定される黒色の付着物が認められる。

須恵器

40～43は坏の破片で、40～42の3点は第1号整穴遺構付近からの出土である。40は底部直上にヘラ書きが見られる。外面には火燻痕が見られるが内面には見られず、代わりに重ね焼きによる他の坏の底部が溶着した痕跡が認められる。40の底径は溶着痕の直径とほぼ同じである。

44～46は長頸壺の頸部で、すべて破片であるためそれぞれの径は推定できないが、44は大型の、45・46は小型の長頸壺の頸部と考えられる。

47・48はロクロ使用の壺の破片で、それぞれ肩部片と、肩部から胴部にかけての破片である。ともに自然釉の付着が見られる。

49～63は甕の破片である。胴部上半、特に肩部の破片が多く出土している。いずれも外面に叩き目を有しており、半数以上の内面には当て具の痕跡が見られる。叩き目は平行叩き目であるが、非常に密度の高いものも認められる。当て具は綾杉状もしくは鳥足状のものが大半を占める。図示しなかったが、掌底状の円形のものも少量見られた。肩部片の多くには自然釉の付着が見られる。

その他の遺物 (図22)

64～68は製塩土器の破片であり、24点出土したが、多くは2～3cm程度の小破片であった。68は底部破片で底外面に板目の圧痕が見られる。

69は羽口の破片で、先端部がガラス状に溶融している。破片のため装着角度などは不明であるが、製鉄炉に装着した大型のものと考えられる。(白鳥)

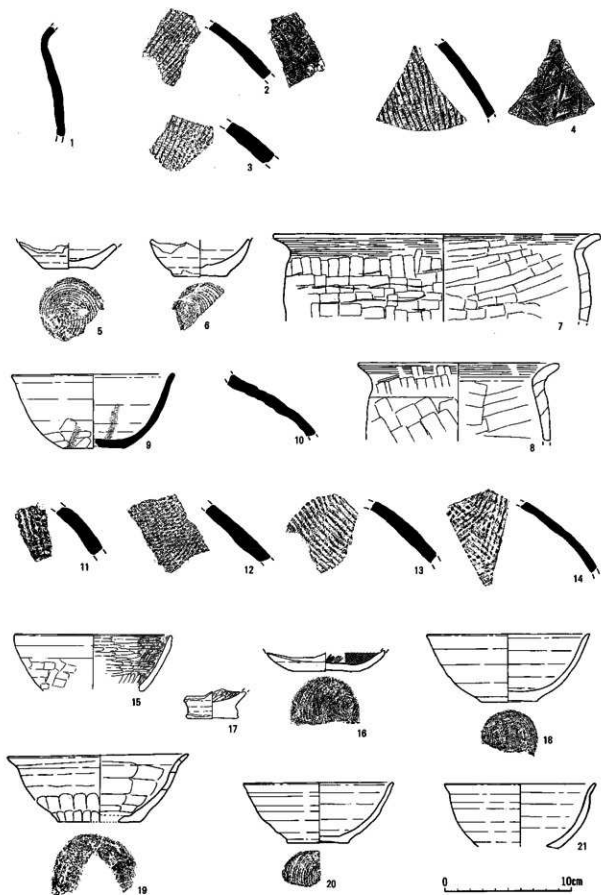


図19 平安時代の遺物-1

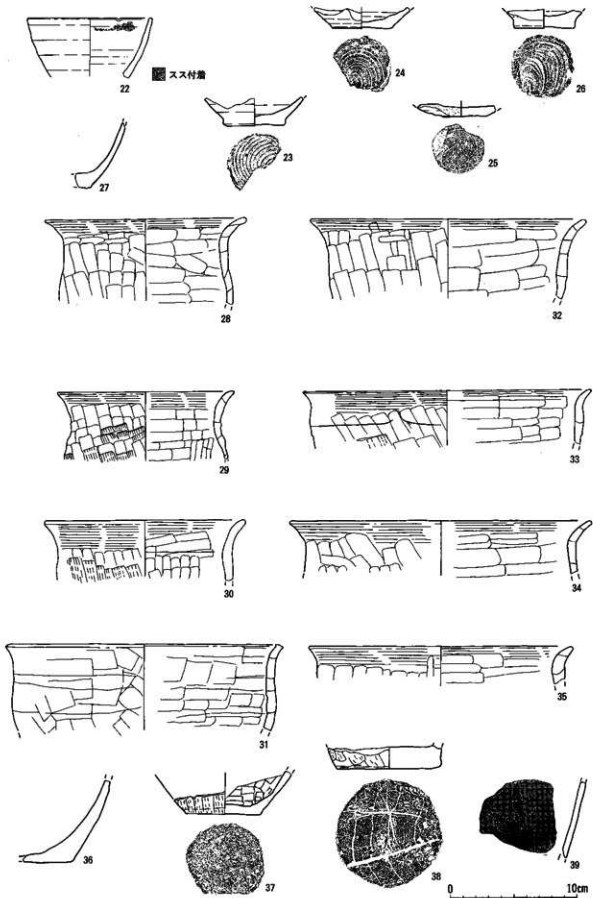


図20 平安時代の遺物-2

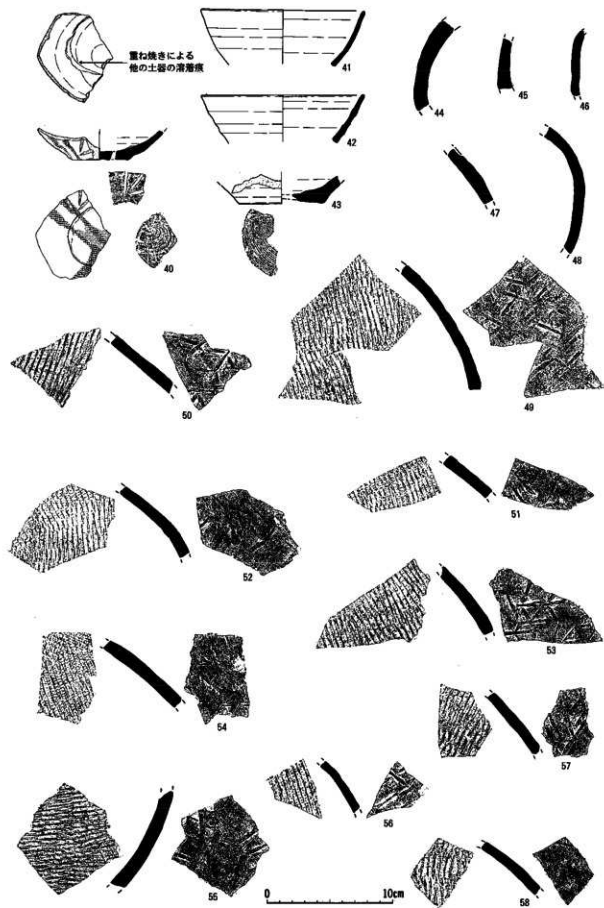


図21 平安時代の遺物-3

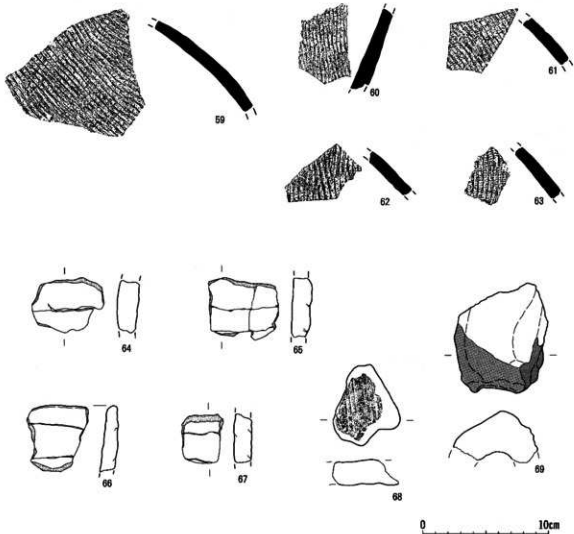


図22 平安時代の遺物-4

表5 出土遺物観察表 (平安時代)

図版番号	種類	器種	出土地点	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	備考
図19-1	須恵器	壺?	1溝				ロクロ	ロクロ	自然軸
2	須恵器	甕	1溝				叩き目	当て具	自然軸
3	須恵器	甕	1溝				叩き目		
4	須恵器	甕	7溝				叩き目	当て具	自然軸
5	土師器	杯	2溝			4.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
6	土師器	環	2溝			4.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
7	土師器	甕	2溝	(25.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
8	土師器	甕	2溝	(15.0)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
9	須恵器	環	2溝	(13.0)	5.8	(4.8)	ロクロ	ロクロ	火摩、回転糸切り
10	須恵器	壺?	2溝				ロクロ	ロクロ	
11	須恵器	甕	2溝				叩き目		自然軸
12	須恵器	甕	2溝				叩き目		
13	須恵器	甕	2溝				叩き目		自然軸
14	須恵器	甕	2溝				叩き目		自然軸
15	土師器	環	1 堅周辺	(12.4)			ロクロ、ナデ	ミガキ、黒色処理	

図版番号	種類	器種	出土地点	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	備考
図19-16	土師器	坏	南東Ⅱ層			5.2	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り
17	土師器	坏	南東Ⅱ層	12.8		4.2	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り
18	土師器	坏	南東Ⅱ層		5.4	4.4	ロクロ		回転糸切り
19	土師器	坏	北	(14.4)	5.2	4.4	ロクロ、ナデ	ロクロ	回転糸切り
20	土師器	坏	1 堅周辺	(11.8)	4.8	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
21	土師器	坏	南東Ⅱ層	(12.0)			ロクロ	ロクロ	
図20-22	土師器	坏	南東Ⅱ層	(10.0)			ロクロ	ロクロ	灯明具
23	土師器	坏	南東Ⅱ層			4.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
24	土師器	坏	南東Ⅱ層			4.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
25	土師器	坏	北東			4.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
26	土師器	坏	1 堅周辺			4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
27	土師器	坏	南東Ⅱ層				ロクロ	ロクロ	回転糸切り
28	土師器	甕	南東	(15.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
29	土師器	甕	南東	(14.0)			指ナデ、ヘラナデ、ケズリ	指ナデ、ヘラナデ	
30	土師器	甕		(16.0)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
31	土師器	甕	北	(22.0)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
32	土師器	甕	1 堅周辺	(22.0)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
33	土師器	甕	南東	(22.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
34	土師器	甕	中	(23.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
35	土師器	甕	中	(20.8)			指ナデ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ	
36	土師器	甕							底部
37	土師器	甕	南東			5.8	ケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	底部
38	土師器	甕	南東			8.2	ケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	木炭痕
39	土師器	?	南西				ロクロ?		黒色付着物
図21-40	須恵器	坏	1 堅周辺		(4.8)		ロクロ	ロクロ	火漚、回転糸切り ヘラ書き、滑着痕
41	須恵器	坏	南東Ⅱ層	(13.0)			ロクロ	ロクロ	
42	須恵器	坏	1 堅周辺	(13.0)			ロクロ	ロクロ	
43	須恵器	坏	南西Ⅱ層		(6.6)		ロクロ	ロクロ	火漚、回転糸切り
44	須恵器	長頸壺	—				ロクロ	ロクロ	
45	須恵器	長頸壺	北西				ロクロ	ロクロ	
46	須恵器	長頸壺					ロクロ	ロクロ	
47	須恵器	壺					ロクロ	ロクロ	自然釉
48	須恵器	壺					ロクロ	ロクロ	自然釉
49	須恵器	甕	中				叩き目	当て具	
50	須恵器	甕	中				叩き目	当て具	
51	須恵器	甕	中				叩き目	当て具	
52	須恵器	甕	—				叩き目	当て具	
53	須恵器	甕	中				叩き目	当て具	
54	須恵器	甕	南東Ⅱ層				叩き目	当て具	
55	須恵器	甕	南東Ⅱ層				叩き目	当て具	
56	須恵器	甕	南東Ⅰ層				叩き目	当て具	
57	須恵器	甕	中				叩き目	当て具	
58	須恵器	甕	中				叩き目	当て具	
図22-59	須恵器	甕	中				叩き目		自然釉
60	須恵器	甕	南東Ⅱ層				叩き目		
61	須恵器	甕	南東				叩き目		
62	須恵器	甕	中				叩き目		自然釉
63	須恵器	甕	南東Ⅰ層				叩き目		
64	製塩土器						巻き上げ	ナデ	
65	製塩土器						巻き上げ	ナデ	
66	製塩土器						巻き上げ	ナデ	
67	製塩土器						巻き上げ	ナデ	
68	製塩土器								底面砥目仕痕
69	羽口								先端部溶融

2 縄文時代・弥生時代の遺物

土器 (図23)

1～17は縄文時代の土器であり、1・2は口頸部で横位に2～4条の撫糸圧痕がみられる。胴部は、単節の斜縄文が主体であるが、0段多条の原体もみられる。器厚が厚く胎土中に細砂粒が多いのが特徴で、内面の調整はザラザラして滑らかではない。

17は平口縁で器厚が薄く、横位沈線の下部に山形状の文様を施している。器内外面に赤色顔料の付着が確認される。

19は横位沈線文と連続刺突を施文している。

20～25は胴部破片で単節縄文の原体を用い、26・27は附加縄文と思われる。

30は横位方向に展開する磨消縄文、31は縄文地に縦・斜位の沈線を施文している。

32～33は口頸部の部位で、横位沈線を施している。34・35は胴部破片で、縦・横位方向のナデ調整が見られる。32～35は同一個体の可能性が高い。

時期は、口縁部破片が少なく、時期を明確にすることは難しいが、1～16は縄文時代前期の円筒下層d式に比定され、17は縄文時代晩期に比定できると思われる。

18～29は、弥生時代中・後期に比定できると思われる。

30・31は、縄文時代後期の可能性も考えられるが断定できなかった。

32～35は、埴文土器と考えられる。

(成田)

石器 (図24・25)

礫素材の石器は12点出土したが、剥片石器は出土しなかった。

1は磨製石斧で、基端部は一部欠損している。全面研磨による成形で、研磨前の敲打痕などはほとんど磨消されている。刃部はやや鈍角で、平面形は片側がやや斜位になっているが、欠損後の再加工の可能性も考えられる。

2は主要痕跡から敲打具としたもので、柱状節理をもつ棒状礫の2面と1稜を機能面としている。

3～5はくぼみ石とした一群で、3は不整な円礫の一面を機能面としている。

4は小判形の礫の表裏2面と両側縁を機能面としている。くぼみはいずれも深く、使用頻度が高かったものと考えられる。5も小判形の礫を素材とし、1面に敲打による浅いくぼみが認められる。

6～8は石棒で、6は完形品である。表面には部分的に敲打及び研磨痕が認められるが、自然面を多く残し加工痕跡は全面には及んでいない。7・8は欠損品で、7は端部に敲打による加工痕が認められる。

9・10は扁平な礫を素材とした石皿で、9は片面使用の欠損品である。10は両面使用の完形品で、片面には広範囲の研磨面が見られ、もう一面は研磨による大きなくぼみが作出されている。使用頻度は高かったものと考えられる。

11は台石の一部と考えられる破片で、部分的に研磨面が認められる。欠損後に熱を受けており、機能面及び破断面にすずの付着が見られる。

12は蒲鋒形の欠損品で、石製品の一部と考えられる。石質は非常にきめの細かいシルト岩製で軽い素材である。

(白鳥)

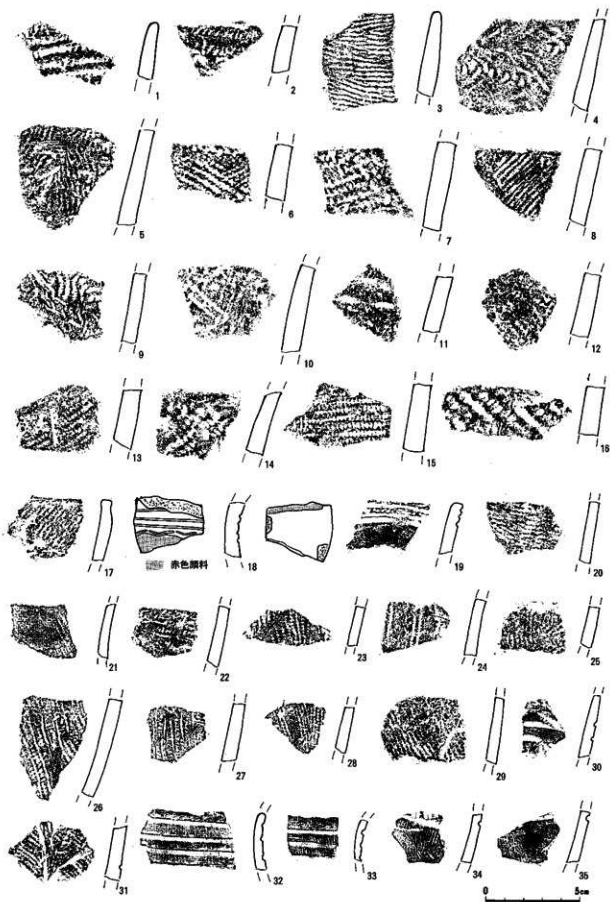


図23 縄文時代・弥生時代の土器

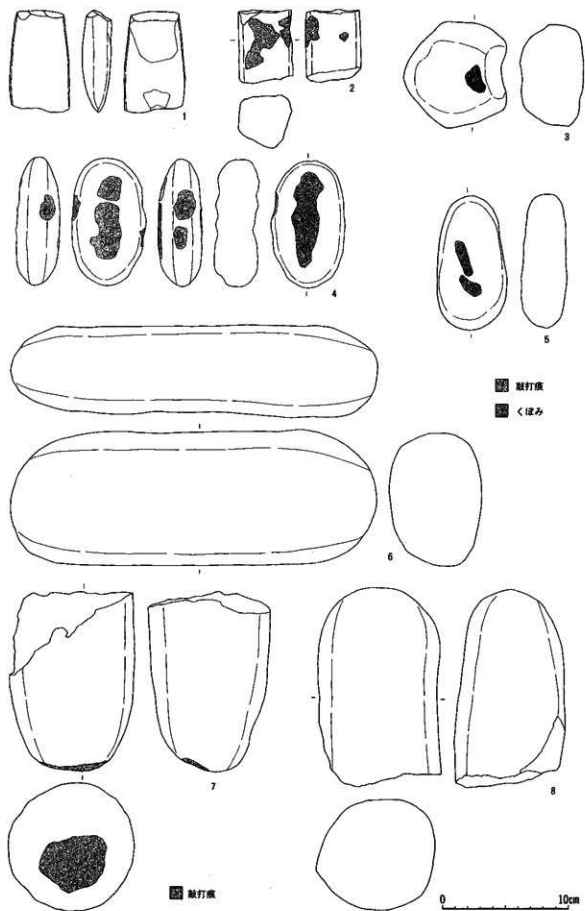


図24 縄文時代の石器-1

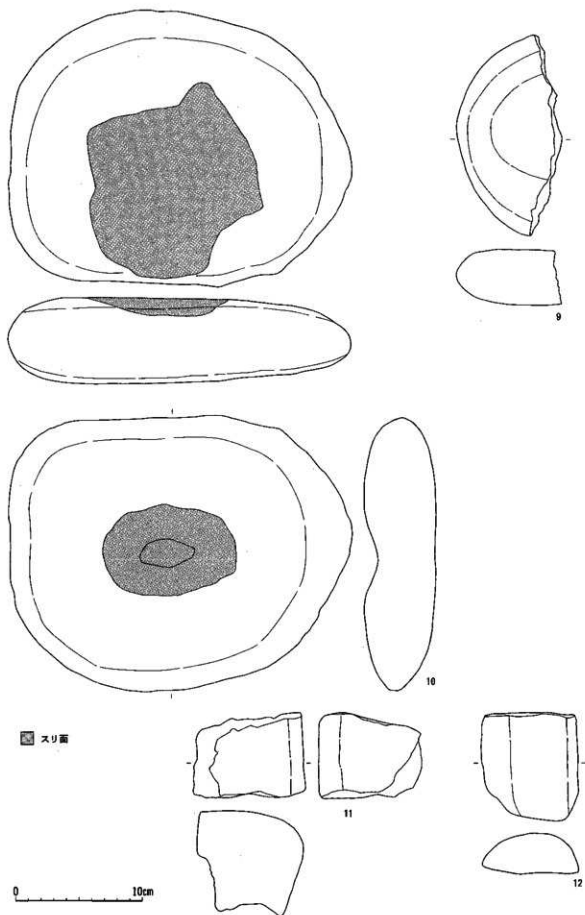


図25 縄文時代の石器-2

表6 出土遺物観察表(縄文時代他)

図版番号	山土区	層位	器種	部位	文 様 等		備 考
図23-1	北東部		深鉢	口頸	横位の撫糸圧痕		
2	中央部		深鉢	口頸	横位の撫糸圧痕		
3		I	深鉢	口縁	平口縁 縄文(LR)		
4	中央部		深鉢	胴	縄文(LR)		
5	南東	II	深鉢	胴	縄文(RL)		
6	2溝		深鉢	胴	縄文(LR)		スス状炭化物付着
7	中央部	II	深鉢	胴	縄文(LR)		
8	北東部		深鉢	胴	縄文(LR)		
9			深鉢	胴	縄文(LR)		
10	1溝	ベルト	深鉢	胴	縄文		
11			深鉢	胴	横位の撫糸圧痕(?)		
12		I	深鉢	胴	縄文(RL)		
13		I	深鉢	胴	縄文(LR)		
14	中央		深鉢	胴	縄文(LR)		
15	南西	II	深鉢	胴	縄文(LR)		
16		I	深鉢	胴	縄文(RL)		
17	北		鉢	口縁	平口縁 縄文(LR)		スス状炭化物付着
18			鉢	口頸	横位・山形状(沈線)		器内外面に赤色顔料を塗布
19	2溝		鉢	口縁	平口縁 横位沈線と連続刺突		
20	北		鉢	胴	縄文(RL)		スス状炭化物付着
21	1溝		鉢	胴	縄文(RL)		スス状炭化物付着
22	中		鉢	胴	縄文(LR)		スス状炭化物付着
23	南東	II	鉢	胴	縄文(LR)		
24	北東		鉢	胴	二条の縦位沈線		
25	1溝		鉢	胴	縄文(RL)		スス状炭化物付着
26	中		鉢	胴	附加縄文		スス状炭化物付着
27	北東		鉢	胴	附加縄文		
28	南東		鉢	胴	縄文(LR)		スス状炭化物付着
29			鉢	胴	縄文(RL)		スス状炭化物付着
30			鉢	胴	横位の磨消縄文		
31	中央		深鉢	胴	地文縄文(RL)地に弧状文の沈線		
32	南東	II	甕	口頸	横位の沈線		スス状炭化物付着
33	南東	II	甕	口頸	横位の沈線		スス状炭化物付着
34	南東	II	鉢	口頸	横位の沈線とナデ調整		スス状炭化物付着
35	南		鉢	胴	ナデ調整		スス状炭化物付着

表7 出土石器計測表

図版番号	器 種	出土地点	計 測 値				石 質	備 考
			長さmm	幅mm	厚さmm	重さg		
図24-1	磨製石斧	南東	8.1	4.7	2.3	155.5	安山岩	
2	敲き石		(5.7)	4.2	4.0	172.8	流紋岩	
3	くぼみ石		8.3	8.1	5.1	475.9	安山岩	1ヶ所使用
4	くぼみ石		10.3	6.0	3.4	249.0	安山岩	4面使用、使用頻度大
5	くぼみ石		10.6	5.4	3.5	226.4	安山岩	1面使用
6	石棒 2溝横	中央	29.2	10.6	7.2	367.4	流紋岩	完形
7	石棒		(14.1)	9.8	10.2	1812	流紋岩	欠損、端部に成形痕
8	石棒		(15.6)	9.2	8.8	2001	流紋岩	欠損
図25-9	石皿		27.2	21.4	6.9	797.2	安山岩	約2分の1残存
10	石皿	北東	(15.9)	(8.3)	4.3	6580	安山岩	完形品、両面使用、片面の中央使用頻度大
11	台石		(6.5)	(8.9)	(8.3)	759.4	流紋岩	破砕後、被熱(煤付着)
12	不明		(8.4)	(7.6)	(3.1)	107.3	シルト岩	かまぼこ型、石製品?

第V章 五所川原線No.2 鉄塔

地番：青森市高田字朝日山717、外 対象範囲：13m×10m

調査区域は、急勾配の杉の林で、地表面には間伐材や下枝がそのまま廃棄され、さらに笹を含めた下草が繁茂していた。杉は5m程の間隔に植えられ、幹回りも太いものであった。

調査には地表面の廃棄物を除去することと、粗掘り時には杉の根を傷つけないことが条件となったが、調査期間が限られていることから、廃棄物の少ない部分に試掘トレンチを設け、この結果によって全体計画を立てることとした。

試掘トレンチは調査区全体の状況が把握できる位置に設けることとしたが、現地には仮中心杭と北東隅の仮杭が確認されただけで、他の境界杭は確認できなかった。

このため、調査区域の形状を考え、中心杭を基準に、調査区外を掘り込む危険のない距離（約4m）にトレンチを設定することとした。トレンチは廃棄物が少なく、杉の根を傷つけない場所を選定して4箇所設置することができた。

試掘は下草の除去から行った。表土剥ぎを終えた時点で自然礫が多く出土しはじめ、約30cm程で砂質の固い地山につきあつた。他のトレンチも地形の差による深さの違いはあったものの同じ状況であった。

さらに調査区の下位斜面を含め、下草を取り除きながら遺物を探したが、1点も出土しなかった。このため、調査区内には遺構及び遺物は包含されていないものと考え、調査を終了することとした。

(白鳥)

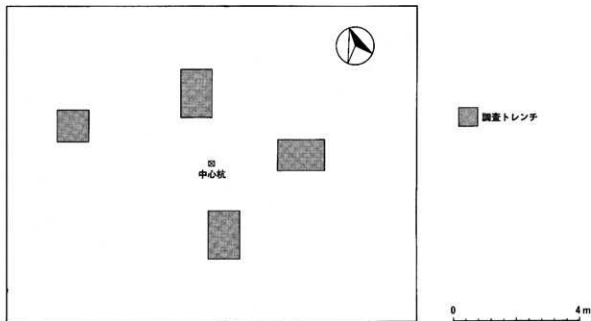


図26 五所川原線No.2 鉄塔調査区域図

第VI章 青弘線No.2 鉄塔

地番：青森市高田字朝日山717、外 対象範囲：8 m四方

この鉄塔移設予定区域は、他の4基分の区域と異なって朝日山（3）遺跡内に含まれており、遺跡北端部の丘陵部にある。標高は81.5mで陸奥湾を見渡せるなど眺望が開けた場所である。

予定区域は8 m四方の方形で64㎡で、一部が細い山道にかかっているが、杉の木の伐採は終了していた。

この区域の辺にあわせて、L字状に幅1 m・長さ12mの試掘トレンチを設定して調査しており、調査面積は約12㎡である。

その結果、遺構・遺物は全く検出されなかったで、これ以上の調査は不要と判断し、調査を終了した。なお、トレンチ内では深さ1.0～1.1mほどで地山の黄褐色土に達している。

（福田）

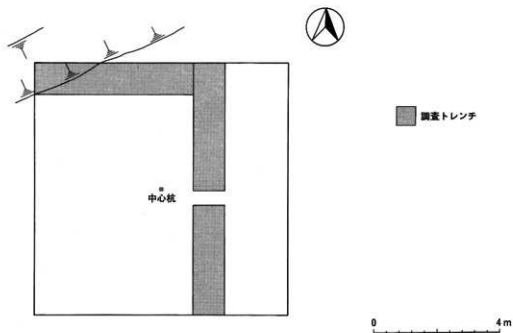


図27 青弘線No.2 鉄塔調査区域図

第七章 まとめ

今回の調査は、送電铁塔部分といういずれも小範囲の調査であったが、以下の成果が得られた。

朝日山(2)遺跡

沖館A線№1铁塔

現地形が、過去の铁塔建設に伴う工事による掘削等によって形成された地形であることが判明した。遺構では、掘り込みの深い竪穴住居跡1軒、大溝跡1条、溝跡1条、土坑8基が検出された。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器片、縄文時代の土器片、弥生時代の土器片がデスクトレー3箱分出した。また、堆積土中には白頭山-苦小牧降下火山灰がブロック状に堆積していた。

沖館A線№2铁塔

遺構類似の掘り込みが確認されたが、底面の掘削痕から近・現代の攪乱とした。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器片、縄文時代の土器片がデスクトレー2箱分出した。

今回の調査では遺構は確認できなかったものの、遺物の散布が見られることや、県道部分の調査区と同レベルの平坦面であることから、周囲には遺構が存在する可能性が高いと考えられる。

五所川原線№1铁塔

現地形は平坦な畑地であり、既設の铁塔も存在するが、沖館A線№1铁塔とは異なり盛り土によって資材搬入路が確保されたとのことで、調査区は保存されているようである。

遺構は、部分的な確認であったが竪穴住居跡3軒、土坑5基、溝跡10条、竪穴遺構1基、焼成遺構1基が検出された。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器片を中心に、縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器などがトロ函3箱分出した。また、堆積土中には白頭山-苦小牧降下火山灰の堆積が確認された。

五所川原線№2铁塔

杉林内の急斜面地であり、立木及び間伐材の廃棄などによって調査区域は限定されたが、調査の結果、遺構・遺物は認められなかった。

朝日山(3)遺跡

青弘線№2铁塔

斜面頂上部に立地しており、下草除去後に調査を行ったが、遺構及び遺物は認められなかった。

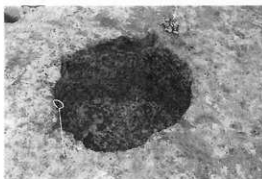
朝日山(1)～(3)遺跡は、変電所、道路等の建設に伴いこれまで数期にわたり調査しているが、今回の調査は、調査の空白部を補う遺跡範囲確認的な性格も持っている。

今回の調査の成果は、遺構の連続性や遺跡の広がりを知り得る好資料となったものと考えられ、朝日山(1)～(3)遺跡の場の利用がより高密度であったことを裏付ける証左になったものと考えられる。(白鳥)

沖籠A線No.1 鉄塔



第1号溝跡



第1号土坑

沖籠A線No.2 鉄塔



調査前の状況（北東→）



調査区（南→）

五所川原線No.1 鉄塔



調査前の状況（南東→）



調査風景（南→）

五所川原線No.1 鉄塔



苫小牧火山灰確認状況



第2・3号住居跡(周溝)



第1・2号土坑



第2号土坑(焼土)



第2号土坑焼土



第5号土坑

五所川原線No.1 鉄塔



第1号溝跡



第2号溝跡



第1号溝跡セクション



第2号溝跡セクション



第1号住居跡カマド
第3・4・10号溝跡



調査区東側部分 (北→)

五所川原線No.1 鉄塔



第1号焼成遺構



第1号焼成遺構



第6・7号溝跡・第1号壑穴遺構



調査区東側(南→)



調査終了時全景



調査区南側(北→)

五所川原線No.2 鉄塔



調査区域（杉林）



調査トレンチ

青弘線No.2 鉄塔



既設鉄塔（斜面向下）



調査風景



調査トレンチ

図 6

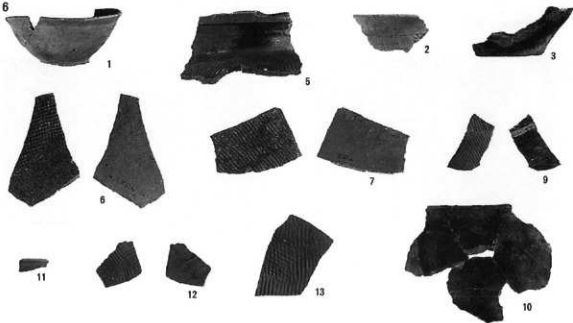


図 7

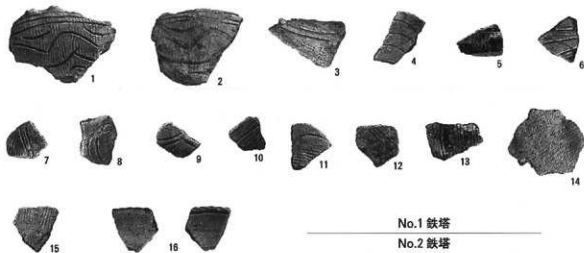


図 9



図 10



写真-6 沖館A線No.1・2鉄塔出土遺物

S=1:4.5

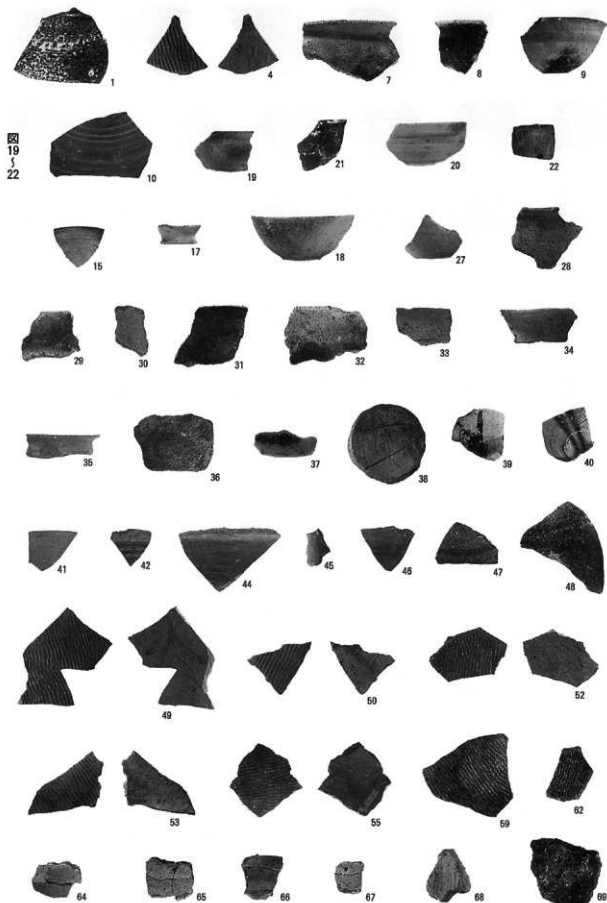


写真-7 五所川原線No.1鉄塔出土遺物(平安時代)

S = 1 : 4.5

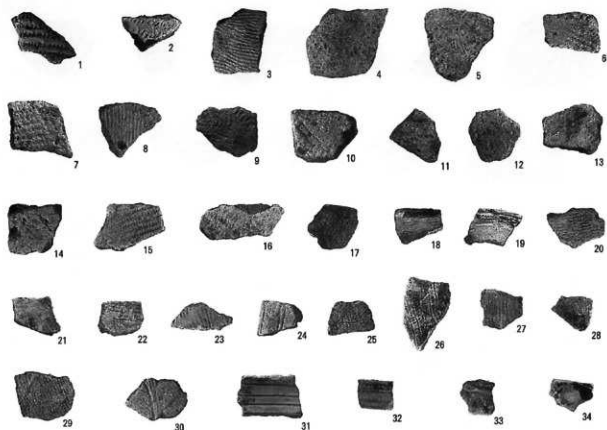


図23

図24・25

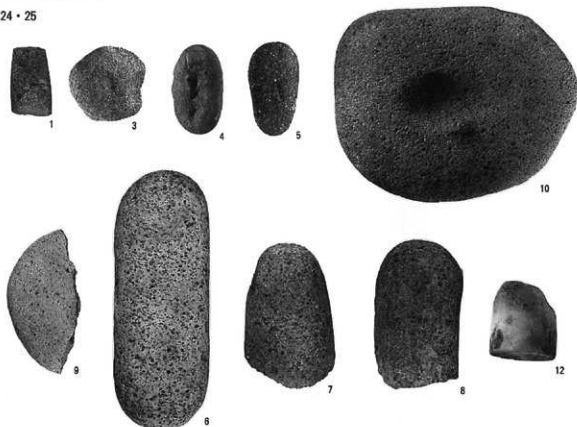


写真-8 五所川原線No.1 鉄塔出土遺物 (縄文・弥生時代)

S = 1 : 4.5

報告書抄録

ふりがな	あさひやま(2) いせき さん							
書名	朝日山(2) 遺跡Ⅲ							
副書名	東北電力株式会社送電鉄塔移設工事に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第316集							
編著者名	白鳥文雄・成田滋彦・福田友之							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城市天田内152-15 TEL. 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2002年2月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさひやま(2) 朝日山(2) 遺跡	あおもりけんあさひやまし 朝日山(2) 青森県青森市大字高 田字朝日山398、外	02201	197	40° 46' 34"	140° 42' 53"	20000424	600	東北電力株 式会社の送 電鉄塔移設 工事に伴う 調査
あさひやま(3) 朝日山(3) 遺跡	あおもりけんあさひやまし 朝日山(3) 青森県青森市大字高 田字朝日山717、外	02201	198	40° 42' 40"	140° 42' 45"	20000531		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
朝日山(2) 遺跡	集落	平安時代	住居跡1軒、土坑8 基、溝跡2条		土師器、須恵器 (縄文・弥生土器)			
沖船A線№1鉄塔	集落	平安時代	住居跡1軒、土坑8 基、溝跡2条		土師器、須恵器 (縄文・弥生土器)			
沖船A線№2鉄塔	散布地	平安時代	なし		土師器、須恵器 (縄文・弥生土器)			
五所川原線№1鉄塔	集落	平安時代	住居跡3軒、土坑5 基、溝跡10条、焼成 遺構1基、竪穴遺構 1基		土師器、須恵器、 製塩土器 (縄文・弥生土器)			
五所川原線№2鉄塔			なし		なし			
朝日山(3) 遺跡			なし		なし			
青弘線№2鉄塔			なし		なし			

青森県埋蔵文化財調査報告書第316集

朝日山（2）遺跡Ⅲ

—東北電力株式会社送電鉄塔移設工事に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成14年2月18日

発 行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL. 017-788-5701、FAX. 017-788-5702

印 刷 所 東奥印刷株式会社

〒030-0862 青森市古川二丁目17-5

TEL. 017-776-5361、FAX. 017-776-5363



活彩あおもり

— 輝くあおもり新時代 —